

温泉保養地と社交 — フランスを中心に —

大橋 絵理

長崎大学言語教育研究センター

The Spas and the Society — Focusing on France —

Eri OHASHI

Center for Languages Studies, Nagasaki University

Abstract

The European spas have been considered the mysterious places to heal diseases since the period of ancient Rome. In the United Kingdom, the spas around Bath reached their heyday in the 18th century. As seen in Jane Austen's novels, the people went to Bath for social contact rather than sickness recuperation. In the 19th century, the spas located in the heart of the mountains were regarded as the place of the lovers by the movement of Romanticism in France. However, as the purpose of the stay in the spas became the socializing life, the low sort of visitors increased, and the incidence of deception and betrayal increased. The spas where such complicated elements were mixed, gave the inspiration to the writers, who have produced various novels and poetry.

Keywords: 温泉保養地、社交、フランス、イギリス、ドイツ、ロシア

1. はじめに

古代ローマ時代には、温泉は神々が人間の病を癒すために授けてくれた神聖な泉だと考えられていた。そのため温泉が湧きでた場所で、人々は神やニンフに治療を祈願し、回復を感謝するために木で作られた目、腕、足や小さな人形を捧げていた¹。その跡は 19 世紀まで残り、イポリット・テーヌは『ピレネー紀行』のなかで、次のよ

うに述べている。「ローマはバニェールのいたるところに、その足跡を残している。これら古代の記念物のうち、もっとも魅力的なものは、病人が全快したとき、ニンフらをたたえて建立されたという記念碑で、その碑文はいまもなお残っている。病人たちは、大理石の湯舟に身を横たえながら […] 女神のもたらす効果を身を感じたことだろう」²。

しかし、ヨーロッパの温泉保養地の歴史を見てみると、医療だけでなく、特に 19 世紀の保養地の重要な特徴のひとつが社交であったことがわかる。これまでの研究では、ア尼克・コシック編による『18 世紀及び 19 世紀におけるイギリスとフランスのスパ』³で温泉保養地の療法、歴史、文化が概観され、フォーチュナド・ダヴィ＝ヌアルの『作家とテルマリスム—1800-1914 年』⁴では、日記、書簡、旅行記を通して作家達がいかに温泉保養地とかかわったかが分析されている。ただし、これらの研究書も社交に触れてはいるが、その多くは療養者の実生活における社交に関してであり、文学作品内の社交についての分析はあまり見受けられない⁵。そこで、本稿ではフランスを中心に、文学に描かれた温泉保養地における社交の表象を考察し、その意義を検討していく。

2. 療養から社交へ

数多くの温泉保養地を巡ったフランスの作家の一人はモンテーニュであろう。彼は 1580 年から 1581 年にかけてドイツからイタリアまで、様々な温泉保養地に滞在しながら旅行し、その体験を『旅日記』や『エッセー』の中に記している⁶。だが、それは腎臓結石治療のためであり、社交が目的ではなかったと考えられる。

温泉療養に社交的な要素が見られるようになるのは、セヴィニエ夫人の書簡あたりからである。彼女はリウマチの悪化のため、医師から春になってヴィシーへ行き温泉療法をすることを勧められる。そのため 1676 年の 5 月 20 日から 28 日にかけてヴィシーに滞在し、娘へ何通も手紙を書き送った。彼女はシャワー等の治療方法を驚きを持って語り、療養者たちの生活について述べている。「朝 6 時には泉に行きます。そこには皆いて鉱泉を飲んでいきます。ぐるりと回って行ったり、来たり、散歩したりしてミサに行き、鉱泉を飲み、きちんとした礼儀をもって親密に話をします。それでもまだお昼です」⁷。退屈をもてあました人々は、治療が終わった夜に楽しみを求めるようになる。「夕食のあとは、誰かの家を訪れます。今日は私の家でした。 […] フルートを持参したこの地方のお嬢様達がすばらしいプレーを踊りました」⁸。温泉保養地を訪れた人々は、音楽会や朗読会を開き、噂話をしながら穏やかな日々を過ごしていた。そこはまた、確固たる病気の治療法もなかった時代、しばしば療養に訪れる貴族たちによって田舎に持ち込まれた小さな宮廷とも言えるものであった。ただし、フランスでは 1789 年の革命以降、貴族階級が減少し温泉保養地は急激にさびれていく。

しかし、王族や貴族が特権階級として常に存在していたイギリスでは、バースに代表される温泉保養地の最盛期は 18 世紀だった。バースの人気理由は、王族や貴族が頻繁に訪れたこともあるが、なによりもリチャード・ナッシュの功績に負っている。彼はバースの中心ともいえる社交会館で、舞踏会の司会、進行役を完璧にこなした初代の儀礼長だった。彼がつくりあげたバースの社交界はロンドンの社交界よりも人為的だった。ナッシュは、バースでの生活の時間、規則を細かに規定し、舞踏会では的確に人々を出会わせ、滞在者たちを喜ばせたのである⁹。

ジェイン・オースティンは『ノーサンガ・アビー』や『説得』の恋愛の舞台としてバースを選択する。これらの物語の主要登場人物たちがバースに滞在するのは、病気の療養のためではない。彼らが期待するのは活発な社交生活なのである。そのために『ノーサンガ・アビー』¹⁰では、儀礼長が重要な役割を果たす。主人公キャサリンが後に結婚することになるヘンリーに出会うのは、バースの社交会館であった。誰も知り合いがおらず、ダンスの相手がみつからないキャサリンに儀礼長がヘンリーを紹介したのだ。また『説得』では、主人公アンの準男爵の父親は、借金の返済のためにサマセット州の自宅を貸出し、バースに家を借りて住むことを決意する。その理由は、バースであれば「比較的少ない出費でも紳士の体面を保つことができるから」¹¹であった。バースに引っ越した父親と虚栄心の塊である姉のエリザベスはそこでの生活を非常に気に入る。

バースはあらゆる点で期待以上に素晴らしいとサー・ウォルターとエリザベスは嬉しそうにアンに言った。[…] びっくりするほど多くの人たちが自分たちとの交際を求め、誰もかれもがこの家を訪問したがっている。すでに何人も断っているが、それでもひっきりなしに、見ず知らずの人たちが玄関の前に名刺を置いていくのだそうだ。¹²

それに反して、引っ込み思案なアンは華やかな社交が繰り広げられるバースにどうしてもなじめない。だが、最終的には彼女も若い時に別れた恋人からバースで求婚され、物語はハッピーエンドで終わる。

他方、フランスでは産業革命後イギリスに遅れてブルジョワたちが台頭してきた 19 世紀が温泉保養地の最盛期となる。そしてイギリスと異なり、野生味のある自然の風景に囲まれている温泉保養地が流行となった。なぜなら 18 世紀までは、自然は人間にとって有益であるか、あるいは科学的な興味を引き付けるかでその重要性が判断されていた。しかし、19 世紀になってロマン主義が流行すると、自然に対する考えに変化が起こる。つまり雄大な自然に囲まれて、初めて人々は本当の感情を抱くことができ、魂の純粋さを高めることができると考えられるようになったのである。

特に切り立った山々の風景は人々の感受性を最も豊かにするという理由で、アルプス山脈やピレネー山脈を旅する人々が増加していった¹³。彼らは険しい山々を前にして畏怖を感じ、自分が小さな存在でしかないということを再確認し、満足する。そしてこのような思想の傾向が山奥にある温泉保養地の流行に結びついていったのである。

そのため、19世紀のロマン派の有名な詩人や作家たちは、山に囲まれたエクス・レ・バンやモン・ドールへとしばしば赴いた。たとえば、ラマルティエヌは結核とうつ病の療養のために1816年から1830年までエクス・レ・バンに通う。そこで彼は同じく結核の6歳年上の人妻ジュリー・シャルルと出会い恋に落ちるが、彼女はしばらくして亡くなってしまふ。『冥想詩集』の中の、二度と会えない彼女を想って書いた悲しみと孤独にみちた抒情的な詩「湖」は、エクス・レ・バンの美しい自然の情景によせて創作されたロマン派の代表的な作品の一つとなっている¹⁴。

さらに、『冥想詩集』後30年以上たってラマルティエヌは、再びジュリーとの恋愛を『ラファエル』の中で描く。物語の舞台はやはりエクス・レ・バンである。小説では、「私は太陽の光と温泉の水音で起き、入浴し、昼食の後は前日と同じように散歩し、憂鬱さに沈み込む」¹⁵と、まず主人公の温泉保養地での療養生活が語られ、その後同じホテルでの療養者であるジュリーとの悲劇的な恋愛が展開していく。このようなラマルティエヌの作品によって、緑深い山々、美しい神秘的な湖、中世の修道院の廃墟に囲まれたエクス・レ・バンはロマンティックな温泉保養地の象徴となった。

また、シャトーブリアンは、『墓のかなたの回想』の中で、1829年にコトレを訪れ、レオンティエヌ・ヴィヤヌヴとの初めての出会いを次のように描いている。「詩作にふけりながら歩いていると、急流のそばにいた一人の若い女性と出会った。彼女は立ち上がり、私のほうへまっすぐにやってきた。彼女は村の噂で、私がコトレにやってきたと知ったのだ」¹⁶。当時シャトーブリアンは62歳、レオンティエヌは26歳だった。彼女はオック地方に住む女性で、シャトーブリアンの作品に感動をおぼえ、彼に手紙を書く。それ以降二年間にわたって彼らは文通していた。年の差にもかかわらず、シャトーブリアンは彼女と恋におちる。だがある晩彼女の家まで腕を貸しながら送っていきながら、彼は次のように感じる。

私はこれほどの恥ずかしさを今まで感じたことがなかった。私の年でこのような愛情を感じるのは本当にどうしようもなく愚かなことのように思えた。この奇妙な感情に惹かれれば惹かれるほど自分を辱めているような気がする。[...]私はモンテーニュが言った状態からはほど遠い。「愛は私を覚醒させ、節制させ、それに優美さ、心配りを与えてくれる」。ミッシェルよ、君はすばらしいことを言ってくれた。でも、私たちの年では、愛は君が思ったようなことを私たちにはもたらしてくれないのだ。¹⁷

これはシャトーブリアンにとって最後の恋愛だった。二人は三週間の間、政治的あるいは思想的な考えを互いに述べあいながら逢瀬をつづけたが、性的な関係を持たなかったと言われている。ロマン派の大家であるシャトーブリアンにとって、長い間文通でしか知らなかった若い女性とためらいながらも気持ちを通わせるには、自然豊かなピレネー地方の歴史ある温泉保養地は理想的な空間であったと言えるだろう。

3. 社交と通俗性

このようなロマン主義の作家たちの影響もあり、人々は都会では得られない感情の高揚を求めてますます温泉保養地へと向かうようになった。テーヌもまたフランスの多くの温泉保養地を巡った一人である。彼は喉の病気を患い、1854年に医者からピレネー山脈の温泉保養地サン・ソヴールでひと夏過ごすことを勧められた。テーヌは貧しく、その費用を払うことができないので療養をあきらめようとしたが、アシェット書店からピレネーの温泉に関する『ガイド』を出版してくれるように依頼され、サン・ソヴール、オー・ボンヌ、オー・ショッド、バレージュ、コトレ、バニエール・ド・ビゴール、ビュッション等の温泉保養地へ赴いた。そして、その『ガイド』は、文学性が評価され1855年に『ピレネー地方温泉旅行』として出版され、その後も修正および加筆され1858年に『ピレネー紀行』として再度出版された。

テーヌは、オー・ショッドでは、源泉に祭られているニンフたちについて空想を巡らし、バレージュでは、メーヌ公がこの温泉地から母親のモンテスパン夫人にあてた手紙や、メーヌ公に付き添ってきたマントノン夫人に思いをはせ、コトレではマルグリット・ド・ナヴァールが『デカメロン』を模しこの地を舞台にして執筆した『エプタメロン』を再読する。そして、彼はリュッションの温泉場を次のように語る。

大通りのはずれに、パリの植物園で見かけるような、しゃれた小屋があり、その一角に牧場から流れてくる水が貯めてある。小屋の壁に当たる部分には、曲がりくねった木の枝を、皮つきのまま格子風に組み合わせてある。屋根は藁葺で、天井には一面に苔がはえている。蛇口のそばにいる娘が湯治客に硫黄水の入ったコップを配る。4時ごろになると、美しく着飾った夫人たちが現れる。湯治場に着くと、彼女たちは板を組んで作った日陰のベンチに腰をおろす。そして、芝生で遊んでいる子供や、川下のほうは斜面に沿って連なる樹木や、部落の点在する広い緑野を眺める。¹⁸

壁は自然のままの枝で組み合わされて作られ、天井にも苔が生えているというように、湯治場の建物は周囲の美しい自然と一体化しているように見える。しかし、「パリの植物園で見られるような」という文章から、この温泉場はパリからの滞在者たちが田

舎とはこうあるべきだという固定観念に沿うように造られたとも考えられる。またテーヌ自身も、完璧な美しい田舎のイメージを壊さないように描写していることが見てとれる。なぜならこの場面には都会の洗練された裕福な女性たちと、鉱泉を配る田舎の素朴な娘しか登場せず、現実というよりも理想化された情景となっているからである。

上記のような抒情的な風景を読者に示しながらも、テーヌは冷静に温泉保養地を舞台に繰り広げられる恋愛小説を読んだ人々が抱くロマンティックな夢想に対して警告を発する。

一般人にとって、温泉地の生活は詩的で、様々な事件、わけても恋愛をそこに求めるのがあたりまえのことになっている。そんな人々は、シャルル・ド・ベルナールの『銀の指輪』¹⁹やジョルジュ・サンドの『ラヴィニア』²⁰などを読まれるといい。[...] 人々は湯治場では多くの帽子を使い古し、多くの桃を食べ、多くのことを話す、人間的に言っても、思想的に言っても、事実は温泉地の生活は他の場所とほとんどかわりない。²¹

この文章を書いたあと、テーヌは「社交界 1」から「社交界 5」まで小題を付け、湯治場に滞在する人々を分類してみせる。『ピレネー紀行』の中で、この「社交界」以外に番号をつけてまで書かれた他の章はないことから、彼は社交が温泉保養地の重要な要素であると考えていたと推測される。しかもその中で、テーヌは裕福な人々、貴族、学者等を類型化し、彼らの俗性を暴いていく。特に「社交界 2」では、観光客について言及している。「観光客といっても千差万別だが、話し方や外見や物腰などで、区別はできる。そのおもなもののいくつかをあげてみよう」²²と、登山客、旅行者、家族連れ、食事にいる客を分析する。そのことから我々はいかに多くのタイプの観光客が温泉保養地を訪れていたかを知ることができる。このように温泉保養地が流行するにつれ、その抒情性は薄れ、非常に通俗的な側面が際立つようになったのである。

先に述べたようにフランスではフランス革命によって温泉保養地を訪れる貴族の数は激減した。だが、社交と言う側面から見ると、貴族たちは 19 世紀のフランスでの温泉保養地の流行に少なからず役割を果たしていた。たとえば、フォルジュ・レ・ゾーの滞在者の統計では、第二帝政期には貴族階級は 36.46%しか訪れていない。しかし、ホテルはイメージを高めるため、貴族たちを優遇し、彼らの滞在を際立たせるような接待を行った。その結果、ブルジョワたちは、貴族たちの贅沢に見える装いや気取った生活様式に憧れをもち、それらを模倣するために温泉保養地に滞在するようになったのである²³。オクターヴ・ミルボーは『神経衰弱者の 21 日』で、ある侯爵夫人の温泉保養地での様子を強烈な皮肉をもって描いている。「彼女は、ここでいつも

多くの取り巻き連中に囲まれている。しょっちゅうパーティーや遠出をして。そして人間の持つ獣性のあらゆる見本を持っている賛美者の一団を引き連れている」²⁴。

風刺的な作風で知られるドイツ人作家ジャン・パウルも温泉保養地を舞台とした『カッツェンベルガー博士の湯治旅行』を執筆している。この風変わりな物語では、博士と一人娘テオダがフォン・ニースという若者を同行者としてマウルブロンという温泉保養地に出かける。彼らは病気治療のために温泉保養地に滞在するのではない。博士は自分の著作を厳しく批判した温泉医師のシュトリキウスに復讐を企てるためと、名付け親を頼まれそうな状況から逃げだすためという理由で、娘は父親の付き添いとしてマウルブロンへ出発する。そのような彼らが訪れる温泉保養地は、裕福なブルジョワや貴族たちが、金銭にあかせて飲食し、温泉の付近の自然の中を散策し、コンサートを聞き、劇場へ行き、カジノで賭けをし、舞踏会で朝まで踊る場所として描かれている。

ニースが博士たちに同行する理由は、社交場としての温泉保養地の姿を強調するものとなっている。彼は、じつは非常な人気を博しているトイドバッハというペンネームを持つ劇作家なのだが、そのことを最初は隠す。なぜなら、マウルブロンでトイドバッハの崇拜者であるテオダに自分がトイドバッハだと告白し驚かせ、結婚を申し込む計画をたてているからである。そして彼は、プロポーズの最も効果的な場所として温泉保養地を選択したのだった。

さてニースはいたる所で著名な劇作家として、長いこと、ある湯治場を訪ねる計画をたてていた、それは生きたパンテオンを自分の周りに築き上げたいと思う月桂冠に満ちた著者が選ぶに最もふさわしい場所としてであって、とくにこれらの地の高貴な朝の酒宴や無礼講、富や教養の会合のせいであった。²⁵

多くの湯治客の前でプロポーズをすることでテオダを感動させ、加えて自分の名声を高めることができるのはマウルブロンが最適だとニースは判断したのだ。だがテオダはニースを知るにつれて、彼の思惑とは反対に虚栄心に満ちた彼の性格を嫌悪するようになる。そして自分を騙してまで人々の歓心をかおうとしたニースに怒りを覚え、彼女は友人に「フォン・ニース氏は悪漢よ。この人は詩人のトイドバッハ本人で、このご本人に私を導こうとしたの」²⁶と批判する。

その後、彼女は同じく湯治者であったトイドバッハという同名の数学者に恋をするようになる。彼は騙され、自尊心を傷つけられたテオダを救うために、ニースに対して「私の名前トイドバッハは、フォン・ニースさん、借用のものではありません。私の名前はただ一つです。そして世の中に存在するのも私の名前だけです。あなたは名前を二つ有すると公言していますが、そのうち私のだけは返還願います」²⁷と他の湯

治者たちの前で公言する。ジャン・パウルの小説には、劇作家のトイドバッハ＝ニースと数学者のトイドバッハに見られるようなドッペルゲンガー的な人物がしばしば登場する。『カツェンベルガー博士の湯治旅行』では劇作家のトイドバッハという名前がペンネームであることに注目すべきであろう。劇は架空の人物たちが架空の人生を送るフィクションであり、またペンネームも本当の名ではない。そのことからパウルは、作家および文学作品の物語空間は偽りでしかない自嘲をこめて述べてもいるのだと推測できる。パウルが物語の舞台として、虚勢をはる社交人たちで形成された虚偽的な空間である温泉保養地を選択したのはごく自然だったと言えるだろう。

4. 社交の限界

このように温泉保養地はロマンティックな空間から人々の欲望や愚かさが露呈する低俗な場へと変貌していったが、さらに排他的にさえなっていく。バルザックの『あら皮』では、体調不良のラファエルに医師たちは次のように言う。「我々はみんな君に、サヴォワ地方のエクスの温泉か、あるいはもしそのほうがよかったら、オーヴェルニュ地方のモン・ドール温泉に行くようにすすめる。空気や景観はサヴォワのほうがカンタル県よりも気持ちがいいと思うが、まあ君の好みしだいさ」²⁸。

ラファエルは最初エクスに赴くが、『あら皮』には、朝から鉱泉を何杯も飲み、温泉に入り、シャワーを浴び、遊歩道を散歩するという療養者たちの日常的な行為は一切描かれていない。彼らはあたかも病気など患っていないかのようなのである。ラファエルはエクスで同じクラブに通う湯治者たちから反感をかうが、その理由は以下のものであった。

もともと瞑想的な精神の持ち主であるラファエルは、自分が引き起こした反感の一般的で合理的な理由を直観で悟っていた。温泉地というこの小さな世界は、おそらくははっきりとし意識しないながらも、上流社会をつかさどっている大きな掟にしたがっているのであり、その仮借ない道徳がラファエルの目の前でむきだしにされたのだった。²⁹

自分の悲壮な運命に気を取られ、非社交的な態度を取り続けたラファエルは、湯治者たちの気に障ったのだ。つまり温泉保養地は、都会から離れた田舎にありながら、貴族や裕福なブルジョワたちのパリの社交界の縮図となっており、その軽薄さや残酷さが、さらに凝縮される閉鎖的な特異な空間となっているのである。それゆえに、その世界に溶け込もうとしないラファエルを彼らは徹底的に排除しようとし、彼に決闘を申し込みその存在を消そうとする者まで出現する。

湯治場の残酷さをともなった社交の異様さは、フランスに限ったことではない。ロ

シアの作家レールモントフも 1840 年に出版された『現代の英雄』の中でロシアの温泉保養地を描いている。この小説は複雑な構造になっており、全 5 章の中で、最初の 1・2 章は主人公ペチョーリンの知人によるペチョーリンの話で、他人から見た両極端な行動にはしる傲慢で不遜な性格のペチョーリン像が語られている。そして、後半の 3 章以下は、ペチョーリン自身の手記によるもので、彼の心理が詳細に描かれている。その中の第 4 章の「侯爵令嬢メリー」の舞台がピャチゴールスクという温泉保養地となっているのである。そのような湯治場でペチョーリンが出会った人々は次のように描写されている。

彼らは飲む — しかし、鉱泉をではない。あまり散歩もせず、ただ通りすがりだけで恋をする — 彼らは遊んでいて、退屈をこぼしている。彼らはおしゃれである — 硫黄水に自分の覆い付きのコップをおろしながらも、気取ってアカデミックなポーズをする。文官たちは明緑色のネクタイをつけ、武官たちは襟からたたみカラーをのぞかせている。彼らは地方の婦人に対する深い軽蔑を告白し、彼らを受け入れてくれない首都の貴族のサロンを思って嘆息している。³⁰

このような温泉保養地で、何事にも情熱を持たないペチョーリンは、友人のグルシュニーツキイが恋していた侯爵令嬢メリーを、彼から奪うという目的だけのために、彼女に対して恋愛ゲームを仕掛ける。また、それは策を弄してタタール人の領主の家から略奪してきたかつての恋人で、彼が捨てたのち人妻になったヴェーラとの関係を再開させるためでもあった。メリーを愛しているわけではないペチョーリンは、彼女の愛情がグルシュニーツキイから自分に移ったと知ると、彼女も捨てる。他人の感情をもてあそぶ残忍さと無気力さが入り混じったペチョーリンの女性たちに対する冷酷な仕打ちは、偽善的でエゴイストな俗人たちにあふれたピャチゴールスクこそ最もふさわしい。最終的にペチョーリンはグルシュニーツキイから決闘を申し込まれ、銃弾に倒れる。実際ピャチゴールスクは病弱だったレールモントフ自身が幾度も療養のため訪れた場所であり、彼も 27 歳の若さで、ここで決闘し命を落とすのである。

さらに 1879 年に出版されたアナトール・フランスの『ジョカスト』では、浴場自体が不吉な空間となっている。不動産関係の仕事をしているフェレール氏の一人娘エレヌは、非常に年上の裕福な銀行家のアヴィランド氏と結婚するが、結婚前に出会った若い軍医のロングマールと再会し、彼に惹かれていく。だが夫の死後、精神の変調をきたし、首をつって自殺してしまう。そのような彼女が自殺した場所はセーヌ川に浮かぶ入浴施設の一室であった。美しかった彼女はそこで「顔はむくみ、黒い膨らんだ舌が口から」³¹であるという醜い姿になってしまう。エレヌが死に場所として選択した華やかなパリの浴場の個室という密室は、裕福な未亡人として多くの人々に

囲まれていても無理解と孤独にさいなまれた彼女の絶望の象徴であると考えられる。

その後、愛する人を失ったロングマールは、パリを去ることを決意し、偶然会ったエレーヌの父親を誘って、モン・ドールに二人で赴き温泉医となる。湯治客は基本的には気候がいい夏の二、三か月しか温泉保養所に滞在しない。かりそめの社交場は一年の大部分は雪に閉ざされ人足が途絶えた場所となる。湯治客が去った冬の間も二人はモン・ドールに残り、ホテルでひっそり暮らす。そして物語はロングマールの独りごとで終わる。

彼は右の親指を左の手首にあてて脈をみた。それからごく低い声で独りごとを言いながらつぶやいた。

一熱、下腹部の緊迫と激痛、咳、呼吸困難、右肩の交感的苦痛、付属なものはひとつもない。こいつはりっぱな肝臓炎だ。

こう言って1年4か月と6日以来、彼ははじめて微笑んだ。³²

エレーヌは自殺する場所としてセーヌ川に浮かぶ浴場を選択したが、セーヌ川と浴場という二重の水の組み合わせは、死に向かって流れ行く逆らいのない人生の暗示になっていると考えられる。なぜならロングマールも緩慢な自殺の場所として、やはり雪と浴場という水に二重に関連し、閉鎖空間であるモン・ドールを選択するからである。さらに物語には明記されていないが、年老いてすでに衰弱しているエレーヌの父親もおそらく同じ場所で死を迎えることになるだろうことは容易に推測できる。

温泉保養地はたとえ流行となっても、古代から病気の療養の場であることには変わりなく、根本的には死と密接に結びついている。そのため温泉保養地の事業者たちが、利益の増加のために病気や死という不吉さを追い払い隠蔽しようとするほどその矛盾が露呈してくるのである。それを端的に描いた一人がオクターヴ・ミルボーであった。彼は『神経衰弱者の21日』の中で温泉保養地の療養の暗部を語る。主人公の「私」はピレネーの温泉保養地に出かけるが、そこで出会うのは他の作家たちも指摘したような典型的な湯治者たちである。「夏には流行だから、あるいは健康のため、それも流行なのだが、という理由で人々は旅行にでかける。社交界のしきたりを尊重し、盲目的に従う裕福なブルジョワたちは、一年のある時期は、仕事や楽しみや怠け心や愛人たちを去り、自分でも理由がわからないまま、移動しなくてはいけないのである」³³。そして「私」は宿泊したホテルで、すべての人がここの温泉のおかげで病気から回復し、20年以上ただ一人の葬式も出したことがないと聞く。しかし、ある夜遅くホテルに帰る時に、暗闇の中で、ひそひそした話し声を耳にする。「私は近寄った。そして、不思議で予想外の不気味な光景を目にしたのだった。4人ずつで運ばれている10個の棺桶を。10個の棺桶が列になって順番に夜の闇の中に消えていった。

誰も死なない町で、私は棺桶にいきあたって困惑した」³⁴。主人公は、棺桶を運ぶ人たちに、それは何だと問いただが、彼らは決して真実を口にせず「保養地から帰る外国人のスーツケースです」³⁵と言い張るのである。

5. 結論

温泉保養地 18 世紀以降ロマンティックな場として機能したが、流行とともに社交的な側面が強調されるようになった。だがそれと同時に、虚栄心、社会的地位に対する嫉妬、金銭への欲望、それに関連する裏切りも露呈する場所となっていた³⁶。さらに、どのように隠蔽しようとしてもそこに通底する絶望や死を覆い隠すことは不可能であった。そして、このような閉鎖された空間で様々な階級の人々が一度に会うことにより生まれた濃密な人間関係こそが、多くの作家達を魅了したのである。恋愛、欺瞞、死等の悲喜劇が混然一体となった温泉保養地の特殊性は、多くの作家たちにインスピレーションを与えた続けた。矛盾や否定的とさえ思える状況が、反対に人間の本能から生まれたエネルギーの横溢を感じさせ、それらを体感することで、作家たちは独創的な作品を生み出すことができたのである。温泉保養地はまさに創作を育む場として確かに重要な役割を果たしたと言えるだろう³⁷。

註

-
- 1 Michel Jalatel, *La santé par les eaux : 2000 ans de thermalisme*, L'instant, Durable, 1983, p. 14.
 - 2 Hyppolite Taine, *Le voyage aux Pyrénées* (1855), Paris: Librairie de l'Hachette et C^{ie}, 1858, p. 270. イポリット・テーヌ『ピレネー紀行』、杉富士雄訳、現代思潮社、1973年参照。
 - 3 *Spas in Britain and in France in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*, Edited by Annick Cossic and Patrick Gagliou, Cambridge Scholars Press, 2006.
 - 4 Fortunade Daviet-Noual, *Les écrivains et le thermalisme 1800-1914*, Éditions Universitaires de Dijon, 2017. 作家たちは梅毒を始めとしてリウマチや精神的な病の治療のために温泉保養地に滞在した。そのため書簡や日記は悲観的なものが多い。
 - 5 イギリスでは社交について特にジェイン・オースティンの作品とバースに関する研究が見られるが、やはりオースティンのバースでの生活という視点から分析が多い。Voir Terry Townsend, *Jane Austen and Bath*, Halsgrove, 2015. Voir aussi Maggie Lane, *A Charming Place: Bath in Life and Novels of Jane Austen*, Millstream Books, 1988.

- 6 Montaigne, *Œuvres complètes*, édition de Maurice Rat et Albert Thibaudet, introduction et notes Maurice Rat, Paris: Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1963. Montaigne, *Les Essais*, édition établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simon, édition des « notes de lecture » et des « sentences peintes » établie par Alain Legros, Paris: Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2007.
- 7 Madame de Sévigné, *Correspondances, tome II, juillet 1675 – septembre 1680*, texte établi, présenté et annoté par Jacqueline Duchêne, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1974, p. 303. 1676年5月20日、グリニャン夫人宛て。Voir aussi Yves Pouliquen, *Madame de Sévigné et la médecine du Grand Siècle*, Paris: Odile Jacob, 2006.
- 8 Madame de Sévigné, *Correspondances, tome II*, op.cit., p. 303. 「ブレー」はオーヴェルニュ地方の2拍子のダンスである。
- 9 Graham Davis, Penny Bonsall, *A History of Bath: Image and Reality*, Carnegie Publishing, 2007. 蛭川久康、『バースの肖像—イギリス 18世紀社交風俗事情』、研究出版社、1990年参照。
- 10 Jane Austen, *Northanger Abbey* (1817), Penguin Classics, 2003. ジェイン・オースティン、『ノーサンガ・アビー』、中野康司訳、筑摩書房、2009年参照。
- 11 Jane Austen, *Persuasion* (1818), New York: Millenium Publication, 2014, p.13. ジェイン・オースティン、『説得』、中野康司訳、筑摩書房、2008年参照。
- 12 *Ibid.*, p. 82.
- 13 アルプス山脈は、ロマン派の作家や詩人たちにとって彼らのインスピレーションの源となる崇高美を感じることができる特別な場となっていた。ワーズワースは『序曲』の中の「ケンブリッジとアルプス」でアルプスの自然の驚異を書き記し (William Wordsworth, « Book Sixth Cambridge and the Alps » in *The Prelude or; Growth of a Poet's Mind : an Autobiographical Poem, 1805, 1850*, DjVu Editions, 2001)、シェリーもまたアルプスの荘厳さをうたいあげた (Mary Shelley and Percy Bysshe Shelley, « Mon Blanc: Written in the Vale of Chamouni » in *History of a Six Weeks' Tour through a Part of France, Switzerland, Germany, and Holland; with Letters Descriptive of a Sail Round the Lake of Geneva and of the Glaciers of Chamouni*, Published by T. Hookham, jun. Old Bond Street; and C. and J. Ollier, Welbeck street, 1817)。
- 14 Alphonse de Lamartine, *Œuvres poétiques complètes*, texte établi, annoté et présenté par Marius-François Guyard, 1963, Paris: Gallimard, coll. « Bibliothèque

- de la Pléiade », pp. 38-40.
- 15 Voir Alphonse de Lamartine, *Œuvres complètes de Lamartine publiées et inédites*, tome trente-deuxième, Paris: Chez l'Auteur, 1863, p. 197.
 - 16 François-René de Chateaubriand, *Les Mémoires d'outre tombe II*, édition nouvelle établie d'après l'édition originale et les deux dernières copies du texte avec une introduction, des variantes, des notes, un appendice et des index par Maurice Levaillant et Georges Moulinier, Paris: Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1951, p. 376.
 - 17 *Idem.* Voir aussi Graciela Conte-Stirling, *La muse occitanienne de Chateaubriand : Léontine de Villeneuve*, préface de Bertrand de Viviés, études littéraires, critiques Europe France, Paris: L'Harmattan, 2018. レオンティーン自身も自伝を書いている (voir Léontine de Villeneuve Castelbajac, *Mémoires de l'Occitanienne: souvenirs de famille et de jeunesse*, Paris: Les Petits-fils de Plon et Nourrit, 1927).
 - 18 Hyppolite Taine, *Le voyage aux Pyrénées*, op. cit., p. 326.
 - 19 Charles de Bernard, *L'Anneau d'argent* (1861), Nabu Presse, 2011. 1806年に源泉が発見されたサンヴェルジェ・デ・バンを舞台とした主人公ベヌゾンと彼の友人のいとこのアナスタジイとの恋が描かれている。
 - 20 George Sand, *Lavinia*, (1833), Independently published, 2017. リュッションでのイギリス人貴族と以前の恋人との恋愛についての小説である。
 - 21 Taine, *Le voyage aux Pyrénées*, op. cit., p. 273.
 - 22 *Ibid.*, p. 279.
 - 23 Jérôme Penez, *Histoire du thermalisme en France au XIX siècle: eau, médecine et loisir*, préface d'André Gueslin, Paris: Économica, 2005, p. 91. Voir Tailleur Patrick, *Histoire des thermes de Forges-les-Eaux*, Éditions Bertou, 1991, pp. 131-132.
 - 24 Octave Mirbeau, *Les 21 jours d'un neurasthénique*, Paris: E. Fasquelle, 1901, P.102.
 - 25 ジャン・パウル、『ジャン・パウル中短編集』、恒吉法海他訳、九州大学出版会、2007年、19頁 (Jean Paul, *Dr Katzenbergers Badereise* (1809), Adamant Media Corporation, 2000)。
 - 26 同書、149頁。
 - 27 同書、130頁。
 - 28 Honoré de Balzac, *La peau de chagrin* (1831), Paris: Charpentier, 1845, pp. 304-305. バルザック、『あら皮』(「バルザック「人間喜劇」セレクション」第10巻)、

- 小倉考誠訳、藤原書店、2000年参照。
- 29 *Ibid.*, p. 309.
- 30 ミハイル・ユリエヴィッチ・レールモントフ、『現代の英雄』、中村融訳、岩波書店、1981年、114頁。
- 31 Anatole France, *Jocaste et le chat maigre*, Paris: Calmann-Lévy, 1879, p. 145. アナトール・フランス、『アナトール。フランス小説集 12、ジョカストとやせ猫』、佐藤正彰訳、白水社、2001年参照。
- 32 *Ibid.*, pp. 159-160.
- 33 Octave Mirbeau, *Les vingt et un jours d'un neurasthénique*. op. cit., p. 1.
- 34 *Ibid.*, p. 20.
- 35 *Ibid.*, p. 21.
- 36 拙論「『モントリオル』における医師の役割」『長崎大学言語教育研究センター紀要』第2号、31-41頁、2014年、及び「温泉保養地と女性—モーパッサン『モントリオル』」『長崎大学言語教育研究センター論集』第4号、127-137頁参照。 Voir Guy de Maupassant, *Romans*, édition établie par Louis Forestier, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1987.
- 37 ヴィシーではヴェルディの『リゴレット』、ロッシーニの『セヴィリアの理髪師』、プッチーニの『ラ ボエーム』、グノーの『ファウスト』、『ロミオとジュリエット』、ワーグナーの『ローエングリン』などが上演された。また、エクス・レ・バンでは、パリよりも早くワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』が上演されたように、温泉保養地は美術や音楽といった芸術を促進させる役割も果たしてきた (voir Jérôme Penez, *Histoire du thermalisme en France au XIX siècle*, op. cit., p.203)。